

町の入り口が見える頃には、商人などの馬車に追い越されたりすれ違ったりと、町に入る前から活気を感じ取れた。ルークは三組目とすれ違うあたりから頭巾を被りだした。ユノも『慣れない』視線に気づき、顔をしかめた。

「あいつら、目があったなら挨拶くらいしろよな、ったく」

ブランカは二人の様子を見て、何かいいものは無いかと辺りを見回した。すると町の入り口に石碑が立っているのを見つけた。

「ユノさん、あれは何ですか？」

「ん？ ああ、多分ミナートの歴史について書いてあんじゃないかねえか？ 港町が移動して、数十年前にここに落ち着いたらしいし」

ユノはルークに視線を送る。ルークはため息を吐きながらも応える。

「はあ……ユノももう少し自国の歴史くらい身に着けたらどうだ？」

ルークは地図を取り出し、西の端を指さした。

「元々は海に面した町で、統一戦争の頃に竜域から脱し、今の王家による庇護を受けた。そこから武器や防具の商売で財力を手に入れ、統一直前には竜との和解に対して口出しする程に至った経緯がある」

話せば話すほど、ルークの顔が陰しくなる。

「元々多民族で構成された町なのもあり、この町では『王国の人間』こそ部外者とも言える。先に宿を取って服を着替えてもいいかも知れないな」

ユノも「そうだな」と返す様を見て、ブランカは複雑な事情があることを理解しつつ、まだ何か引かかるものがあった。

町の入るまでの会話とはうってかわって、町に入ると露店も店屋も道行くすべての人に声を掛けていた。その声が乱雑に重なり、一番近くにいる客引きが何を言っているのかさえ、注意しないと聞き取れなかった。

ルークは目を回し始めた二人を引きずり、人の波にもまれつつも町の中心にある宿まで辿り着いた。この時間から宿に居るものは少なく、部屋にまで向かえば喧嘩も遠くに聞こえるのみとなった。

「た、助かった……」

ユノは寝台上に寝転がり、いまだにぐわんぐわんと余興の残る耳をぐにぐにと手で揉む。ブランカを椅子に座らせるのと、そのまま机へ溶けるように突っ伏した。ルーク

も寝台に腰を据えようと、移動の疲れも相まってそのまま壁にゆつくりと背を任せた。

「……日が暮れるまでに人通りが減ると良いんだが」

瞬きをする度、意識が遠のきそうになるのをなんとか奮い立たせる。大きく背筋を伸ばし、腕を降ろす勢いで立ち上がると、ブランカの目の前で机を指で叩く。

「少し休んだら市場まで行く。買うものを考えておけ」

少し返答を待っている、「はあい」と気の抜ける声が返ってきた。ルークはユノにも声を掛けようとしたが、既に寝息を立てているのを見て、静かに部屋を後にした。

一人別の部屋に戻ると外套を壁に掛け、服を着替え始めた。鞆の奥から替え着を引っ張り出して椅子の背もたれに掛けると、上から順に留め具を外して上着を脱ぐ。それを畳んで枕元に置くと、野営で着替えられなかった肌着も釦を外していく。袖から腕を抜くと軽く丸めて寝台の上に置く。

肌に残った汗が体を冷やしていくのを感じる。戸棚から柔布を取り出し、手早く拭っていく。

（市場から戻ったら湯浴みもしたいな……）  
拭き終わった布を椅子に置き、新しい肌着に袖を通す。その上に胴衣を羽織ったと同時に、扉を叩く音が聞こえた。「少し待て」と言おうと口を開く前に、ブランカは扉を開けて中に入ってきた。

「ルークさん、この町の市場って……」

ルークがピクリとも動かないのを見て、ブランカは口を噤んで顔を覗き込んだ。ブランカが驚く様子はない。

「……部屋に入るときは、返事を待て」

ルークは何か声を絞り出して告げると、ブランカは自分の失態に気付き「あ、ごめんなさい……」と頭を下げたが、部屋を出ていく気配がない。ルークは一つの仮説に辿り着き、ブランカに声を掛ける。

「……着替えが終わるまで、外で待っていてくれないか」

「あつ、着替え中だったんですね、ごめんなさいすぐ出ます、終わったら呼んでください！」

ブランカは顔を真っ青にして部屋を飛び出していった。扉が完全に閉まったのを見て、ルークは胴衣の留め具を指でつまんだ。

「……物を知らないというのは、本当に怖い……」

ルークが隣の部屋に戻ると、大きな寝息を立てるユノの横で、ブランカは随分としょぼくれていた。

「本当にごめんなさい……」

「次から気を付けるなら、そう気に病むな。こちらはもう気にしていない」

ルークはブランカの隣に座り、ブランカがこちらを見るのを待つ。少しすると、ちら、と視線だけこちらを向く。ルークがゆつくりと頷くと、ブランカは頬のこわば

りを解いて顔を上げた。ルークは喋る早さを落とすつつ問いかけた。

「それで……市場について何が聞きたいんだ？」

「買いたいものはいくつですか、どんなお店があるか分からなくて……」

ブランカは先程から手に持っていた紙を差し出した。ルークが受け取って眺めてみるも、おおよそ文字と捉えられないインクの跡が並んでいた。

「……読み上げてくれないか」

「えっとですね、魔法道具のお店があれば見てみたいのと、予備の髪留めが欲しいのと、その……できれば、お菓子屋さんを見に行きたいです」

段々と弱弱しい声色になっていくのを、ルークは最後まで聞き届けた。

「そうか。それならこの町には全て揃っているだろう。

ユノは……起きそうにないな。武器を揃えるついでに、まずは魔法道具の店にも行こう」

「……はい！」

顔に明るさを取り戻したブランカを連れて外に出ると、まだ活気はあるものの石が敷かれた道がはっきり見えるようになっていた。

「市場はこつちだ、付いて来い」

ルークは人だかりの隙間を割るように進みつつ、都度後ろを振り返る。ブランカは少し遅れつつも、彼の後ろ

を追いかけていた。市場のある区画に向かうまではそれで良かったが、いざ着いてみると隙間が見当たらないほど人が密集していた。

「はぐれたら見つけれない。もう少し近くに居ろ」

「は、はい」

しかし一人が姿勢を変えながらすり抜けていくのがやっとな通りでどうしたものか、ルークが市場の入り口で立ち止まって考えていると、ブランカが手を差し出した。ルークはそれを一瞥すると、ため息を漏らした。

「ユノの入れ知恵だろうが、俺は手を掴まれるのは嫌いだ」

「でも『これが一番良い』ってユノさんが……」

ブランカが手をすす、と引き戻すと、ルークは肩にかけていた鞆の紐を掴む。

「後ろでこれを掴めばいい」

ブランカは「なるほど」と言いながらルークの背後に回る。ルークは背中から少し引張られるのと、その後背中の真ん中あたりに少し暖かいものが当たるのを感じた。背中側を覗き込むと、ブランカの手が触れている。

「これでバッチリですね、行きましょう」

ブランカは振り向いたルークの顔を見上げる。その姿は、ルークには随分と小さく、幼く見えた。

「……そうだな」

ルークはいつもより歩調を緩めて歩き出した。縦に並んで進めば上手く進めるかというとも行かない。武器屋の近く、冒険者や旅人を相手にしている店が集まっている場所まで来ると、ルークですら見上げるような背丈の者が所狭しと犄めき合っていた。

「武器屋まで、あとどれくらいですか……！」

「この辺りなんだが……看板が見えない」

ルークは辺りを見回せるような開けた場所が無いか探すが、そうしている間にも一人は人の波に押しつけられ、気が付けばある店の扉の前まで来ていた。ルークが店から離れようとした瞬間、近くでカランカラン、と小さな鐘が鳴る音がした。

「日暮れまでの大特価、体を芯から沸き立たせる『マグマドリンク』！ 金貨一枚だ！」

近くの屋台に立つ男が声を上げると、周りにいた者の目つきが変わった。

「聞いたことない名前ですね」

ブランカはキョトンとしていたが、ルークはすぐさま振り返ってブランカの腕を掴んだ。

「……まずい、一度ここで人が退くのを待つぞ」

ブランカの返事を待たず、ルークは店の扉を開き、ブランカを先に中へと押し込んだ。扉を閉める頃には、屋台に多くの客が押し寄せ、完全に人で埋め尽くされてい

た。ブランカはその様子を店の窓から物珍しそうに眺める。

「わあ、すごい人気ですね。そんなに美味しいんでしょうか？」

「……あまり触れるべきではないな」

ルークは顔を一層しかめるも、店に置いてあるものを見て、胸を撫でおろした。

「運良く目的の店に着いたな」

二人に気付いた店員が二人に声を掛けた。

「いらつしやい、どんな武器をお探しで？」

「こんにちは。私が使う武器を新調しに来ました」

ブランカが店員に挨拶をすると、店員はほんの一瞬だけ視線を落とし、またブランカの顔を見ると、店員の顔が曇った。

「おそらく槍をお探しだと思いますが、あいにくながら売り切れていますね……」

ルークが店を見渡してみると、店員の言葉通り棚が空いているのが目立つ。

「材料の調達をギルド経由で依頼していますが、最近冒険者さん達になかなか引き受けてもらえなくなってます」

「じゃあ私たちが材料を持ってきたら武器を作ってもらえますか？」

ブランカが身を乗り出して話し始めたのを、ルークは襟元を掴んで引き戻した。

「おいブランカ、勝手に話を進めるな」

そうは言いつつも、ルークも同じ結論に辿り着いていた。しかし店員の顔は変わらず、晴れることは無かった。

「お客様にそう言っていただけるのはありがたいのですが、ギルドに依頼した以上は他の方にはお願いできません」

段々と店員が肩をすぼめていくのを見て、二人は顔を合わせる。ブランカが力強い視線を送るので、ルークは仕方なく頷いた。そして店の外を見て人が掃けたのを確認し、店員に声を掛けた。

「……では、また来る」

店を後にすると、ルークはブランカの方を向く。

「ブランカ、冒険者ギルドの登録に行くぞ」

「気になってたんですけど、ギルドって何ですか」

ブランカは間髪入れずに質問を返す。

「そこからか……」

ルークは少し考える。

「そうだな……同業者同士が助け合う取り決めをする組合のことだ」

ブランカは「ほえ〜」と気の抜ける相槌を打ちつつ、首を更に傾げる。

「……で、なんで登録するんですか？」

「まあ行けば分かる」

人が少なくなってきた市場の通りを、二人は話しながら歩いていく。横に並んで歩くと、たまにブランカが市場の店をちらちらと見ていることに気付き、ルークは少し歩く速さを緩めた。

市場を抜けてすぐの場所に冒険者ギルドが構える建物に辿り着くと、昼の市場ほどではないが賑わいを見せていた。その人だかりを形成する者は皆、鎧や武器、杖や魔導書を携え、建物の前に並ぶ掲示板へと集まっていた。ルークは先導して人を掻き分け、ギルドの扉を開く。

中は外の混沌とした様子に比べ、落ち着いた雰囲気を保っていた。

「こんにちは、冒険者ギルドへようこそ〜」

早速、受付嬢が朗らかに挨拶する。ルークは顔を隠すか悩みつつ、そのままブランカを連れて進む。

「冒険者登録？ しにきました〜」

ブランカがよく分からないままにこやかに返すと、受付嬢もニコリと笑みを浮かべる。

「冒険者登録ですね、かしこまりました！ それではこちらの冒険者ギルドの手引きを読んでもらいます。内容をご確認の上こちらの書類に必要事項の記入をお願いいたします」

受付嬢は慣れた手つきで小さな巻物と数枚の書類を差し出した。ルークが予想外の事態に固まっていると、ブ

ランカはそれらを受け取り、部屋にある椅子に腰かけて手引書を開いた。

「……」

「……逆さまだ」

ルークが周りに聞こえないように指摘すると、ブランカはそそくさと本の天地を返した。

(薄々感じてはいたが、ブランカは文字すら記憶に残っていないみたいだ)

ルークはブランカの横に座った。

「読んでやろうか」

ブランカはコクコクと頷くと、すぐに手引書をルークに手渡した。

「全部は読めないから、そうだな……まず目次を読んで、重要な項目とお前が気になった部分だけ読むか」

——こうして、少女にギルドの手引書を読み聞かせる頭巾の男というのが少しだけ町の噂になるのだった。

〈十二話へ続く〉